

9.4 国際交流

【評価項目 7-0-1】 国際交流（国内外における教育研究交流）

- （必須要素）国際化への対応と国際交流の推進に関する基本方針の適切性
- （必須要素）国際レベルでの教育研究交流を緊密化させるための措置の適切性
- （選択要素）国内外の大学院間の組織的な教育研究交流の状況
- （選択要素）外国人教員の受け入れ体制の整備状況、運用の適切性
- （選択要素）教育研究及びその成果の外部発信の状況とその適切性
- （選択要素）国際的な教育研究交流、学術交流のために必要なコミュニケーション手段修得のための配慮の適切性

<2003年度に設定した目標>

1. 海外から著名な教授を招聘し、講演会を実施する。
2. 大学院の授業科目を担当のため、海外から著名な教授を客員教授として招聘する。
3. 海外の大学と研究科レベルで協定し、学生および教員の交流を行う。

（現状の説明）

高等教育のグローバル化が進み、すべての研究分野で国際競争力が必要となっている。海外の大学との学術交流、教育交流を行うことによって自らの研究活動が活性化するものと考えられる。特に本研究科は外国語、外国文化を研究分野としているため当然のことながら国際交流の推進が重要である。

1. 研究科独自で教育研究交流を行っている海外の大学はない。開設当初より研究科独自の海外の協定校を持ち、今後教育研究面で本研究科の活性化を図りたい旨の考えを持っていたが、実施できずにきている。本学の協定大学や言語教育研究センターが交流している大学、最近新たに海外の大学などから協定の要望のある大学と、研究科独自の交流協定の提携を考えている。
2. 外国人教員の受け入れ体制は、客員教授規程により全学的に整備されており、本研究科も大学全体の制度の下で受け入れを行っている。また短期訪問者については研究科独自でも受け入れている。以下は、本研究科の研究活動を促進させるために実施した、海外から招聘した著名教授による学術講演会である。
 - （1）講 師：Dan Sperber（フランス国立科学研究センター教授）
テーマ："Understanding Human Communication and Its Failures"
実施日：2002年9月27日
 - （2）講 師：Ira A. Novec（フランス国立科学研究センター・フェロー）
テーマ："Reasoning Experiments and the Semantic Pragmatic Distinction"
実施日：2002年9月27日
 - （3）講 師：David Nunan（香港大学教授）
テーマ："What is Task-Based Language Teaching?"
実施日：2002年11月18日
 - （4）講 師：Sandra G. Kouritzin（カナダ、マニトバ大学準教授）
テーマ："The Art of Qualitative Research: Inquiry and Interpretation for

the Language Education Research Agenda"

実施日：2003年4月30日

(5) 講師：Sandra G. Kouritzin客員教授（カナダ・マニトバ大学準教授）

テーマ："Policies and Practices for Bilingual Citizens

－バイリンガル市民を目指して－"

実施日：2004年6月26日

(6) 講師：Stephen Krashen氏（アメリカ、南カリフォルニア大学名誉教授）

テーマ："The Comprehension Hypothesis: Still Correct"

実施日：2004年11月19日

なお、Sandra G. Kouritzin氏は、2004年度春学期に本研究科はじめての客員教員として招聘し、春学期に「言語コミュニケーション文化特論」「言語教育法特殊講義」「教育評価特殊講義」の3科目を担当した。

（点検・評価の結果）

1. 海外の大学と研究科レベルで協定し、学生および教員の交流を行うことは、まだ実施されていない。
2. 海外の著名教授は毎年招聘し、学術講演会を実施しており、研究活動に良い意味で刺激になっている。
3. 2004年度に海外から客員教授1名を招聘した。1学期間であったが、授業を担当し、学生および教員との教育研究交流が行われ、教育研究の新たな刺激となった。

（改善の具体的方策）

海外の大学と研究科レベルで協定し、学生および教員の交流は実施されていないので、今後、北米、ヨーロッパ、アジアなどの大学院との交流を検討する。具体的には、本学と交流のある海外の大学等から交渉を始める。